

クロムメルン老博士逝く

天空に新舊の彗星が去來する毎に、いつも“クロムメルン博士”の名が學界俗界に現はれた。又、大英天文協會の彗星部は、博士の指導によつて、近年非常に活躍し、同會の出版する毎年の Handbook は實に彗星觀測者を最も有効に手引きするものであると言つて好い。この彗星界の至寶たる Andrew Claude de la Cherios Crommelin 博士は、昨年來病床に養生してゐられたが、去る 1939 年 9 月 20 日に惜しくも逝去された。

クロムメルン博士は、1865 年 2 月 6 日、英國の北アイルランド・アルスタ郡 Antrim 郡の Cnshenden 村に生れた。父は Nicholas de la Crommelin 氏と言ひ、古いフランス系の Huguenot の舊家で、博士は其の第 3 男であつた。初め Marlborough 學院で教育を受け、後、ケンブリヂ大學の Trinity 學院に入り、1886 年に優等の成績を以つて卒業した。

大學卒業後、暫く Lancing 學院で助役を勤めたが、1891 年にグリニチ天文臺で助手の定員が増加され、同年 5 月 11 日、ここにクロムメルン氏が多くの候補者中より選ばれて、新任されたことは、元々天文學に傾倒してゐた氏にとつて非常に幸福な巡り合はせであつた。氏はグリニチ天文臺で、初めは經緯儀を擔當し、それにより月の位置の觀測と其の計算に従事したが、まもなく、シープシャンクス赤道儀を用ゐて、目による星の掩蔽や、彗星の位置の眼視觀測をやり、此の研究を、氏は退職の時まで續けた。一方、經緯儀も、エアリ臺長時代の古いものが、氏の初任後、數年にして新しく大型のものに取り換へられて、仕事はウンと擴張された。

氏の研究事項は、其の後、天體軌道の計算や位置豫報の推算にも延び、遂に新彗星や新遊星の軌道や位置豫報の計算者として、氏の名は内外に喧傳されるに至つた。中にも、氏の名を不朽のものとしたのは、先輩 Cowell 博士と協力して、1910 年に再歸すべきハリ彗星の軌道研究と位置豫報とを計算したことであつて、實際、同彗星の近日點通過はコリエル・クロムメルン兩氏の計算より僅々 3 日だけ早やかつたに過ぎない。此の研究の功績のため、コリエル、クロムメルン兩氏は A. G. 協會から Lindemann 賞が授與され、又、オクスフォード大學からは理學博士の名譽學位が贈られた。

クロムメルン氏は主として Monthly Notices, R. A. S. に夥しい研究論文を發表し、又、こうした研究の副産物として、前後 40 年以上にわたり、小遊星や彗星の毎年の出現概況を記述した。又、或る頃は、觀測者のために、火星、木星、土星、及び月面の“物理豫報”を計算發表したが、此の業務は、後に、英國航海曆 (Nautical Almanac) に採り入れられた。尚ほ、氏は、別に又、時

々皆既日食の観測遠征のために諸所へ出張した。其のうち、かの1919年5月29日の日食には南米ブラジルに出向し、太陽附近を通過する恒星の光線の屈曲を観測して、アインシュタイン氏の相対原理を立證したことは、有名で、又、最も大きい功勞の一つであつた。

クロムメリン博士は、1888年にロイヤル天文學會の Fellow となり、1917年から1923年まで同會の幹事を勤め、1929—1931年には其の會長となつた。又、1904—1906年には大英天文協會の會長となり、又、多年にわたり、同會の彗星課の課長であつた。

クロムメリン氏はグリニチ天文臺に36年間勤務した後、1927年5月に退職したが、しかし、好きな方面の研究は、晩年に至るまで止めなかつた。夫人は Robert Noble 師の娘で、Letitia と言ひ、氏と1897年に結婚したが、1921年に逝去された。夫妻は2男2女を有つてゐられたが、長男と次女とはさきに死去された。

自分は多年クロムメリン博士と交り、殊に彗星や小遊星の軌道について、度々交信し、1924年12月には、ロンドンで、大英天文協會の例會席上で始めて面談したこともある。博士は、當時、日本のことや、故中村要君のことなど、いろいろと話された親切を、今でも忘れられないものとして、鮮やかに記憶してゐる。(山本記す)

問ひ。 日本に於ける彗星發見の年月日と、發見者及び彗星名。(いろは生)

答へ。

1903年7月15日、新彗星(“ボレリ”), 横濱市, (故)井上四郎氏。

1919年10月19日、新彗星(“メトカーフ”), 京都大學天文臺, (故)佐々木哲夫氏。

1919年10月26日、新彗星(“フィンレイ彗星”), 京都大學天文臺, (故)佐々木哲夫氏。

1920年5月25日, “第二テムベル彗星”, 京都大學天文臺, 百濟教猷氏。

1922年11月29日, “ベライン彗星”, 京都大學天文臺, 百濟教猷氏。

1925年6月, “第二テムベル彗星”, 大阪, 百濟教猷氏。

1925年12月3日, 新彗星(“ベルテヤ・キルク”), 長野縣, 田中靜人氏。

1930年11月13日, 新彗星, 京都大學花山天文臺, (故)中村 要氏。

1932年7月17日, 新彗星, 米國加州プロリ村, (故)長田政二氏。

1936年7月17日, 新彗星, 東京, 下保 茂氏。

1937年1月31日, “ダニエル彗星”, 靜岡縣島田町, 清水眞一氏。

1939年4月23日, 新彗星(“ハセル”), 倉敷天文臺, 岡林滋樹氏。

1939年11月13日, 新彗星(“フレンド”), 倉敷天文臺, 岡林滋樹氏。